春のよそほひ　見よや人

＊　＊　＊　＊　＊　＊

霞のころも　ほのすきて

ひまより匂ふ　花がさね

昨日にまして　うるはしき

山の姿を　見よや人

蝶　同　人

散る花をおのが友とやおもひつゝ

木かげをさらず蝶のまふらん

柳　同　人

青柳のいとまもあらず拂へばや

池の鏡のちりもくもらぬ

晩鐘　同　人

事無くて今日もすぎぬときく身には

たのしくひゞく入相のかね

春　月　和歌子

梅の花ちりしく庭に春の夜の

月もおぼろのかけそかをれる

水邊柳　同　人

青柳の糸よりかけて池のおもに

水色きよくかけくらふらん

春日亡友を思ふ　同　人

としことにちりてまたさく花のこと

かへしやせまし君がおもかげ

山霞　同　人

あしびきの山里遠くたなびきて

烟にまがふうすかすみかな

霞　同　人

いせのあまかしはやく烟とばかりに

磯やま松のかすむ春かな

海邊春望　　和歌子

青海原見わたすかぎりかすみげり
あまの小舟のかゝろもれつゝ

題しらず　　同　人

わたづみの千ひろふかくも思ひやる
うかぶうき世のすゑやいかにと

＊　＊　＊　＊　＊

湯島の天神に詣うでゝ　　聲水

外國の人に見せばや日のもとの
はまれと薫る梅のはつはな

花見の宴　　同　人

醉ひしれてくるひたはるゝ人々を
あさましとてや花のちるらん

夢に亡友を見て　　同　人

烏羽玉のゆめにうれしき面影は
さめて果敢なき涙なりけり

母にわかれし乳兒　　なにがし

たらちねの母を去たひて泣くちこを
膝にいたきてわれも泣くなり

つひになき母とも去らでみとり兒は
牛の乳すゝりけふもねふれり

悲しさを語らん人もあらなくに
母を去たひて乳兒ぞ泣くなる

いねかてに母こふちこの夜泣には
いにしみたまも迷ひきぬらん

うえて泣くかわか手枕のものうきか
母なきなれを守る夜かなしも

母うせて飲ます乳さへまゝならず
子のゆく末やいかゝあるらん

故さとにわかいもうとあり姉もあり
つれてかへらん母のなき乳兒

勅題雪中の竹　南越　雪堂生

呉竹の高き操を知られける
つもれば拂ふ枝の白雪

同　同　人

降る雪になびけど折れぬなよ竹の
やさしき姿千代も榮えん

霞山衣　同　人

雪きえぬあらちの山も春すぎて
かすみの衣たちはしめける

谷風　同　人

さよ嵐つよくも吹くかたにの戸を
去は〳〵たゝく問ふ人なしに

餘寒風　增野やす子

立そめし霞はきえて又もとの
冬にかへりて吹嵐哉

春雪　田中みの子

冬のうちはまたれし雪の春立て
けさめつらしくつもりける哉

雨中紅梅　木原庫子

降となくふる春雨にぬれ〳〵し
こそめの梅のなつかしきかな

山春月　中村禮子

又更におきしろきかな櫻かり
かへる山路のおぼろ月夜は

閑居　庭田長子

鳥かげのまとのさす日もとふ人の
なきをならひにくらす宿哉